コドモカルタから幼兒唱歌（1）

葛原しげる

まへがき

本誌にはもう珍らしくないのでせうが、私達は、一昨年「子供の作つた子供カルタ」をはじめて見て、驚きました。その文句に、また其の繪に――。

その文句こそは、全く、素直に、何の奇もなく、何の作爲もなく、いはゆる口をついて出たものに過ぎないのですが、いかにも端的で、私共大人には思ひもつかない名文句になつてゐるのに驚かされました。

由來、コドモにはコドモの世界があり、コドモにはコドモの表現があります。その世界を大人が窺けば、愚にもつかないものとしか見えないのですが、それが、子供にとつては、大問題なのです。コドモの表現の中には、それが端的であるあまりに、大人には平凡としか感ぜられないものでありながら、實は、異常に强烈な表現である場合があります。

それらの中から出來た「コドモカルタ」の文句を、はじめて讀んだ時の私達の驚きは、幼兒の表現力の力强さに、頭の下がるを覺え、はては、悅んでしまつていろ〳〵の會合の席上で何處となく、これを紹介しては、味はつたのでした。そして、遂にその中の幾つかをば歌にしました。その歌の中には、もう、曲の出來たものもあります。

まづ、歌にしたいと考へさせられましたものを列記して見ますと、

イモ　ガ　コロガル
ロバ　ガ　ニゲル
ハチ　ガ　サス
ニンジン　タベル　ウサギサン

トンネル　ハ　クライ
チカテツドウ　ハ　トンネル　バカリ
ワクノボリ　ハ　オモシロイ
ヨロヒ　ヲ　キタイ
ムシ　ヲ　トラウ　ト　シタラ　マタハネタ
キナカ　デ　オイモホリ
ノハラ　ハ　ヒロイ
ヤネノ　ウヘ　ノ　スズメ
マリ　ガ　ツキタイ
ケーブルカー　ガ　ヤマ　ニ　ノボル
フクレタ　フウセン
アサヒ　ガ　デテル
サル　ハ　ヒツカク
キリン　ノ　クビ　ハ　ナガイ
メダマ　ノ　オホキイ　キユーピーサン
スズ　ガ　ナル

その他です。中には、もう、この句そのまゝで、立派に童謡の一節を成してゐるものもありまして、愉快の至りで、すぐ、まとまりまして、立どころに、幾つかの童謡が生れるのでした。以下、その中の幾篇かについて、御批評を乞ひたいと思ひます。

（一）

ロバ　ガ　ニゲル（小松耕輔氏曲）

一、ロバ　ガ　ニゲル
　　ロバ　ガ　ニゲル
　　トコトコ　トツト
　　トコトコ　トツト

二、ロバ　ガ　ニゲル
　　ロバ　ガ　ニゲル
　　オミミ　ヲ　フツテ
　　トコトコ　トツト　（昭和幼年唱歌第二集）

驢馬は、逃げ出すにきまつたものではありませんけれども、おとなしいことが特徴の驢馬は、逃げるのが、ふさは

しいのです。逃げないで、子供と仲善しで、東京に近い鶴見の花月園でも、幾頭かの驢馬が、子供を乗せてくれますが、此の馬、決して、疾走したり、荒れ出したりした事がありません。手綱を引張つても、動かない事が、若し有るとすれば、それは、強情なのではなくて、實は、臆病なので、恐ろしがつてゐるのだと、きゝました。そこで「ロバガニゲル」時にしましても、決して、まつしぐらに、當るものは蹶倒して逃げるのではありません。その逃げるやいかにも驢馬的なともいふべき逃げ方をするのです。それをあらはすには、決して、

パカ〳〵パツカ　パカ

ではないのです。又、きつと尾も振つてゐませうけれども、驢馬が、普通の馬と異なるところは、その走り方と共に、その長耳ですから、「お耳を振つて」としました。

お耳を振つて逃げるものには、兎がありますが、兎の逃げるのは、きつと、ピョン〳〵ですから、これは、

「お耳を振つて、トコトコ　トツト」としました。

尙、各節ともに「驢馬がにげる、驢馬がにげる」と重ねましたのは、その實際の表現です。もし、馬のやうに速力の大きいものでしたら、こんなに反覆してゐる遑はないのですが、驢馬は、稍のろいのですから　さういつてゐる間にも、まだ、すぐ眼の前を、やつと何メートルか、逃げたけだなのです。もし速いのでしたら、

ロバ　ガ　ニゲル
ロバ　ガ　ニゲル

などと悠長に見てゐる譯には參りません。これはどこまでも、

トコトコ　トツト
トコトコ　トツト

なのです。ですから、本氣で逃げてゐるやうにも見えないのです。「お耳を振つて、トコトコトツト」なのです。「お耳を振り振り……」ではないのです。「振り振り」は、少し忙がしいのですが、これは、さうでなくて、お耳を「振つて」のんきに、ゆつくり、それこそ、トコトコトツト、トコトコトツトと、逃げてゐるのです。

のちに同じ驢馬を、箏曲童謡として見たくて作りました

のを御らん下さい。これは、私がよく勉强に出かけます相州湯河原溫泉に、昨秋までゐた驢馬の實況です。赤いモスリンの手綱がついてゐまして、首に鈴が、三つ宛つけてありました。それが、湯河原の街道を上下しては、浴客中のコドモが乘つてくれるのを待つのでしたが、如何にものんびりと、ゆつくり、ゆつくり歩くのです。すると、三つの鈴が、めい〳〵に鳴り、又、時に、鈴と鈴とが當り合つて鳴るのです。しかし、その鈴の音は、まことに、驢馬向のものでした。チリン〳〵でなく、チヤラン〳〵でなく、無論ガラン〳〵でもないのです。

ロバサン　　宮城道雄氏作曲

ロバサン　ロバサン
　　トコトツト
オミミ　ピヨコ〳〵
　　トコトツト

カララン　カララン
　　クビ　ノ　スズ
オミミ　ピヨコ〳〵
　　トコ　トツト

ラヂオのテキストには、此の「カララン」が、「クララン」と印刷されてをりました。なるほど、大きいベルの音を英語では、クラング」と、擬聲化してかいてありますから、「クララン」といつても鈴の音になります。しかし、それは大きい鐘のベルです。小さい鈴のベルは、クラングでは絶對にありません。どうしても、カランです。しかし　カララン、カララン」ではありません。「カララン」と、ラが二つ重なるのは、鈴と鈴と二つが相打つ音です。

「ロバ　ノ　オミミハ　トンガリオミミ」

とは、私の受持の小學三年の兒童の綴方に出て來た文句ですが、某氏の舊作童謠に、「ガンギリオメメ」といふ句がありました。それはなくても「トンガリオミミ」は面白いではありませんか。それほど、驢馬の耳が、特異である事は、前記しました。ですから、二節とも、」オミミ　ピヨ

コ〳〵一を入れました。

（二）

ワクノボリ＝ジヤングルジム、これは、危なさうに見えて、實は、少しも危なくない運動器具（？）でした。私の受持の小學三年は男兒三名、女兒三十三名といふ小さなクラスですが、殘念ながら、弱いお子さんが多いので、日光と風との力を借りて、少しづつでも丈夫にしたくて、私は、山積する直し物は放課後へ廻しては、天氣さへよければ、皆と　ジヤングルジムに登つて「鬼ごつこ」をしてゐます。小さい人達には程よい距離の枠の棒が、大人である私には、狹すぎて、脛がつかへたり、頭が、くゞれなかつたりして、追ひつめられる事屢々ですが、しかし、ジヤングルジムは、體の全部を、曲線的に動かす事に於て、よい運動が出來ます。それには兩手兩足に力を十分入れてゐないと、危ない樣です。いえ、手にも足にも自然に力がはいる樣です。そこで、

お手々　しつかり　わくのぼり
あてよ　しつかり　わくのぼり

の句を重く用ひまして、三節のものが出來て、これを、當時の女高師附屬幼稚園主事堀先生のお目にかけましたら、

わくのぼりは、縱横自在に、くゞりぬけられる上、一番上に立つて、手ばなしで、お山の大將も、きめこめられるのです。萬歳も出來るのです。

といふ御返事でした。それで、

上に　のぼつて　萬々歳
お手々をはなして萬々歳

としましたら、この作曲をなさつた梁田先生が、萬々歳が一つの方がよいではないかと仰有るので、いろ〳〵相談しまして、左記のとほりになりました。

1、一段　二段　わくのぼり
　三段　四段　わくのぼり
　　ジヤングル　ジムジム　ジヤングルジム
　　ジヤングル　ジムジム　ジヤングルジム

2、お手々　しつかり　わくのぼり

あてよ　しつかり　わくのぼり
ジヤングル　ジムジム　ジヤングルジム
ジヤングル　ジムジム　ジヤングルジム

3、横に、くぐるよ、わくのぼり
縦に　のぼるよ　わくのぼり
ジヤングル　ジムジム　ジヤングルジム
ジヤングル　ジムジム　ジヤングルジム

4、お手々　しつかり、わくのぼり
あてよ　しつかり　わくのぼり
一ばん上で　うれしいな
お手々　はなして　萬々歳

（昭和幼年唱歌第二集）

一體、「ジヤングルジム」とは何の事でせう。まだ、調べて見ませんが、ジヤングルは、籔でせうか、ジムは、人の名でせう。何にしても　縦横上下に立體的に、棒が組合はされてゐるのが、謂はゞ、ジヤングルなのでせうが　それとは別に何となく、「ジムジム　ジヤングルジム」といふ言葉の様な氣持がしてなりません。誰かは、「ジングル　ジヤム」といひましたが、苺ジヤム、無花果ジヤム、そして、ジングルジヤム。一つ位はかういふ名のジヤムがあつても宜いでせう。

（三）

人蔘たべてる兎さん　　小松耕輔氏作曲

1、兎ちやん　兎ちやん　白兎ちやん
さつきから　何を　たべてるの
ちやん　と　坐つて　食べてるね
かはいゝ　お口で　もぐ〳〵と

2、坊つちやん　坊つちやん　お坊ちやん
わたしは　人蔘たべてます
ほんとに　おいしうございます
あなたも　お一ついかゞです

題として頂きましたのは

ニンジンタベテルウサギサン

ですのに、どこにも、その文句が出せなかつたのが殘念です。けれども、ウサギサンと大人らしくいはないで、

兎ちやん〳〵　白兎ちやん

と可愛らしくいひましたのは、惡くないでせう。そして、

ちやんと坐つて　食べてるね

かはい〻お口で、もぐ〳〵と

といふのは實況です。兩手で持つて食べてる可愛らしさ。たしか、木鼠も、さうして食べますが、兎、白兎の方が、日本人にとつては親しいものです。そして、白い兎が、赤い人蔘をたべてるのですから、美しい事です。

第二節は

お嬢さま　お嬢さま　お嬢さま

としても差支なく歌はれます。そして、ですから、

ほんとに　おいしうございます

あなたも　お一つ　如何です

と、忠義をつくして、申してをるのです。大人らしくても。

（四）

「虫を取らうとしたら又はねた」といふ文句は、そのまゝ歌にはなりませんが、その境致は、非常に面白いものです。それで、第一節は、すぐ、まとまりましたが、この第二節には、いろ〳〵說があります。

虫がはねた　　梁田　貞氏作曲

1、ピョーン　と　はねた

ピョーン　と　はねた

虫が　はねた

觸つて見たら　ピョーンとはねた

抑へようとしたら

ピョーンとはねた

抑えたと思つたら　又はねた

2、ピョーンとはねた

ピョーンとはねた

虫が　はねた

私が觸つたら　ピョーンとはねた

母樣觸つたら　ピョーンとはねた

父樣觸つたら　又はねた

（昭和幼年唱歌第一集）

昔、といつても明治の末頃、當時の學習院々長であつた乃木大將は、國語讀本の文の下品なところは、一々、訂正させらたとききました。即ち、敬語は祖父祖母にのみ使つてあつて、父や母には使つてない事を慨いて、一々、訂正させられたのであるとか。

此の童謠についても、それを考へて、

「お母樣　觸られたら」

「お母樣　お觸りになつたら」

何れでも歌へるのでしたが　しかし、幼兒としては、やはり、あどけなく、

「母樣　觸つたら」

でよいであらうといふ事になりました。それでも、尙氣にかゝるので、いろ〳〵の友人や奥樣方にも謀つたのですがやはり幼兒が、あまり袴をつけるのは　幼兒らしくなくなつてしまふといふことに一決して、今では安心してゐる次第です。

――（以下次號）――